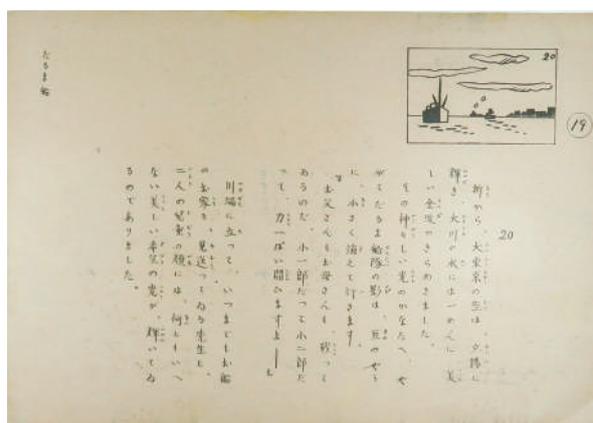
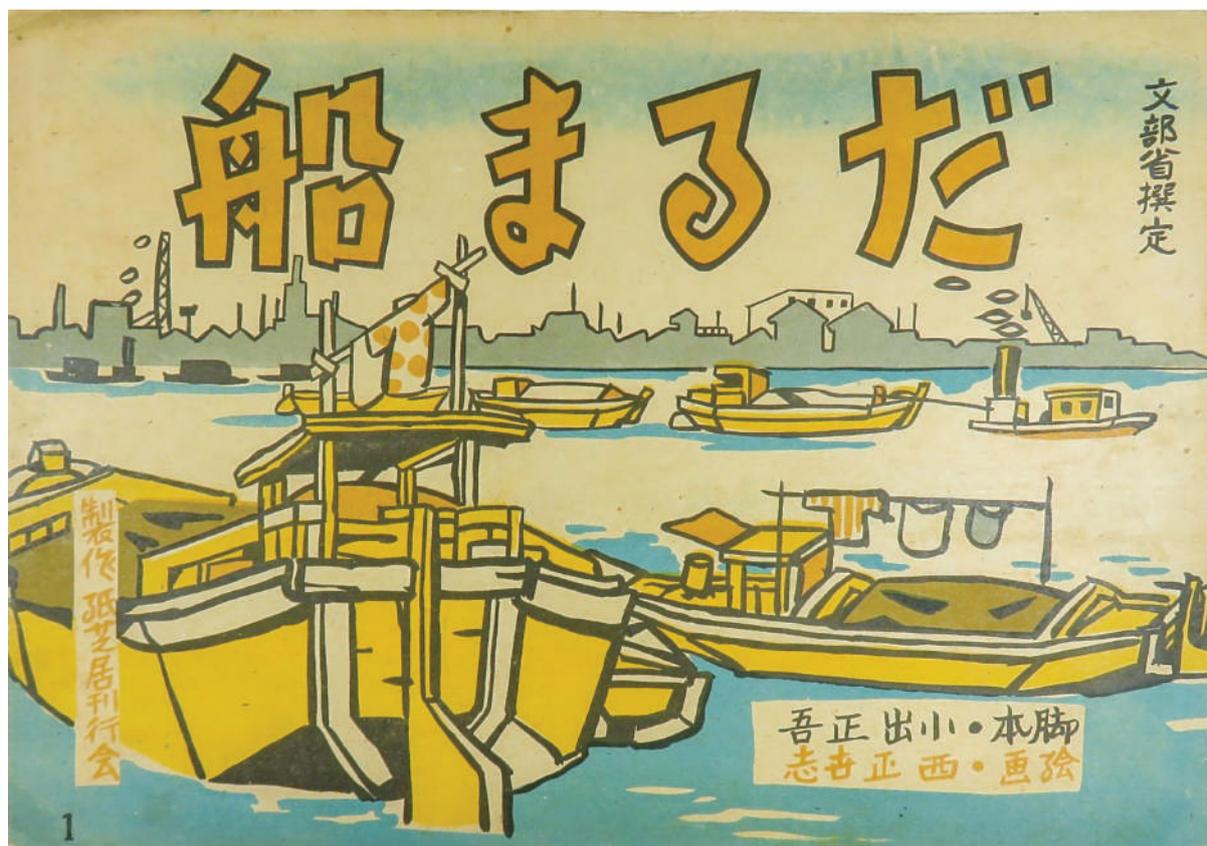




博物館だより

Nagano City Museum
第134号

収蔵資料紹介 後町小学校旧蔵紙芝居



後町小学校旧蔵紙芝居「だるま船」

令和7（2025）年は、戦後80年となります。これまで、長野市立博物館では戦前のモノについて考える企画展などを開催してきましたが、今夏には、戦前・戦中のことだけでなく、戦後の人々の活動について考える企画を博物館エントランスで行います。今回の博物館だよりでは、この企画で取り扱う資料の中から、戦中から戦後にかけて出版された紙芝居について取り上げたいと思います。

はじめに

ここで紹介する紙芝居は、後町小学校にあったとされています。後町小学校は、長野市西後町にあり、平成25(2013)年3月に閉校した小学校です。この紙芝居は、同校が閉校になった後、長野市教育委員会総務課が長野市立七二会小学校笹平分校に保管していたもので、同校が教育支援センター(ササランド)に改装される際に、戸隠地質化石博物館で学校資料として収蔵されることになりました。ここでは、後町小学校旧蔵紙芝居の来歴について考察し、作品と同封資料の内容を紹介したいと思います。

後町小学校

後町小学校は、現在の長野市の中心市街地にあった小学校でした。明治9(1876)年に開校した「第九十一番小学朝陽学校」を始まりとして、学校制度や学区の変更により変遷し、戦後に一時中学校となり、昭和25(1950)年に後町小学校となりました⁽¹⁾。

この学校は、中心市街地にあったため、時節に応じて特徴ある先進的な教育が実践されてきた学校でした。例えば、大正期には「個性尊重」が推進され、独自の補充教材が使われていましたが、昭和前期から戦中は武道を積極的に取り入れ、「忠霊室」を設けるなどしていました。戦後には先進的な設備が多く導入され、他校に先んじて自校プールが設置されました。理科教育が推進された際にはテレスコドームとプラネタリウムが設置され、理科教育センターとしても運用されていました。その後、視聴覚フィルムライブラリーが開設され、長野市内の小学生が学習のために集まりました。

こうしたことから、長野市における教育史や文化史を知る上で重要な学校といえますが、平成25年に惜しまれつつ閉校とな

りました。

紙芝居

現在、紙芝居はファイルホルダーに一枚ずつ入れられて保管されています。紙芝居とともに、戦後の配給券や切手と同封されています。こうしたファイリングは、戸隠地質化石博物館で行われましたが、どちらも後町小学校にあったものです。

紙芝居は11作品あり(表1)、戦中から終戦直後までのものが収められています。

作品名	発行日	発行所
頑張り源さん	昭和16年 8月1日	大日本画劇株式会社
たらひ廻し	昭和18年 5月10日	日本教育画劇株式会社
大空へ叫ぶ	昭和18年 10月20日	富国徴兵保険相互会社
閻魔の廳	昭和19年 12月20日	大日本画劇株式会社
お日さま鳥と あくま鳥	昭和20年 1月10日	大日本画劇株式会社
だるま船	昭和20年 4月20日	紙芝居刊行会
黒い砂と少年たち	昭和20年 11月5日	興亜画劇株式会社 (分室)
踏の下の神様	昭和20年 11月20日	興亜画劇株式会社 (分室)
風の又三郎	昭和20年 12月25日	興亜画劇株式会社分室
金色の魚	昭和21年 4月10日	大日本画劇株式会社
蜘蛛の糸	昭和21年 4月15日	日本教育画劇株式会社

表1 紙芝居の一覧

同封資料

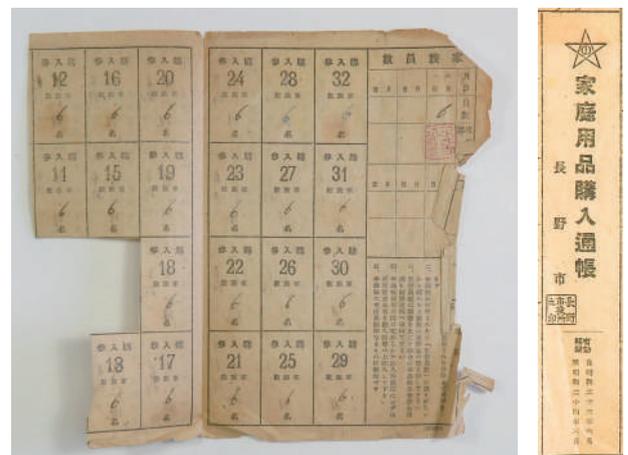


写真1 家庭用品購入通帳(個人情報をトリミング処置したもの)

この紙芝居には、配給切符、配給品の購入通帳などが同封されています（写真1）。

これらは、戦後の物資不足だった時期に用意されたものです。昭和20（1945）年から昭和24（1949）年頃までに発行されていたもので、これは後町にあった学校が後町中学校として運営されていた時期にあたります。中には、昭和25年以降に後町小学校の学区となった家のものもあります。そのため、これらは後述する社会科資料室で集められた可能性があります。

来歴の推察

これらの紙芝居は、戦時下の社会的要請や望まれた考え方がよくわかる資料で、戦時下の後町小学校において使われたのではないかと考えられますが、必ずしも後町小学校で保管され続けてきたものとは限りないと推察されます。

後町小学校では特色ある教育実践を行ってきたために、昭和21（1946）年には、戦時下に使われたものを取り壊し、廃棄することが強く求められました。そのため、軍国主義にかかわるものは、学校に保管されませんでした。「忠霊室」などの国家主義・軍国主義にかかわるものが徹底的に廃棄され、一部のものは譲渡されました⁽²⁾。

一方で後に、後町小学校では社会科資料室を設け、積極的な資料収集を行い、豊富な学校資料を所蔵しました。昭和43（1968）年には、開校90周年記念事業として、学区の各家や同窓生が所有していた資料を集めて社会科資料室を充実させています⁽³⁾。

こうしたことから、紙芝居は、資料室における収集資料という可能性も想像されます。来歴についてはわからないことが多く、想像の域を出ません。しかし、同封されている戦後の配給切符などは個人の家で保管

されていたため、これらとともに戦後に資料室の資料として収集されたのかもしれませんが。軍国主義的な内容の作品は、戦後に後町小学校から個人や他団体に譲渡されたこともあったため、そうしたものの可能性もあります。こうした紙芝居は、戦後に多くが廃棄されたため、まとまって残ることは少なく、重要な資料といえます。

紙芝居の内容

戦時下の様相を色濃く示す内容の作品と、戦後に発行された教訓的な話の作品があります。

・戦時下の国策紙芝居

「頑張り源さん」「たらひ廻し」「大空へ叫ぶ」「閻魔の廳」「お日さま鳥とあくま鳥」「だるま船」は、戦時下で発行された紙芝居です。多くがいわゆる国策紙芝居であり、当時の時節や戦争遂行のための考え方を反映した内容です。「お日さま鳥とあくま鳥」は、戦時下において自国を正義とし、他国を悪として比喩的に演出し、教化しようとする作品です（写真2）。「閻魔の廳」は、地獄における閻魔の裁きの物語に軍人や国債を登場させています（写真3）。話としては唐突に軍人や国債といったアイテムが出てきますが、当時は戦争遂行に必要なことを話が無理やり登場させ、教化しようとする作品がありました。



写真2 「お日さま鳥とあくま鳥」

「蜘蛛の糸」(写真7)は、大正7(1918)年に芥川龍之介が発表した児童向けの小説を原作としています。「この作品の実演は、全体を流れる水のようにしていただきたい」「声も調子も総じて静かに落ち着いてゆつくりとなるよう心がけて下さい」と注意書きがあり、戦時下のものとは趣を異にしています。軍国主義的な表現・演出はみられません。

使用痕について

今回紹介した作品には、上演のための書き込みは多くはみられません。紙芝居の枠に入れて何度も使うことによる折れなどもあまりみられません。

紙芝居は、いつでも、どこでも、だれでもすぐに上演できる点が重視され、普及されたため、使い方が出版社によって書かれているものが多くあります。戦時中には、特に、教化面が重視されて国策紙芝居が発行されたため、使う側は紙芝居の技法に疎いことが往々にしてありました。そのため、書き込みなどをせずに、ただ紙芝居に書いてあることに沿って使っていたことがありました。また、教化的性格が強いものは、買うだけで実際にはあまり使わなかったこともあったのではないかと考えられ、本品もそうだった可能性があります。

黒塗りのような形で軍国主義的な内容を隠すことは行われていません。しかし、戦

後に言葉を書き換えたと思われる部分があります(表紙口絵)。例えば、「戦争のために」という記述の横に鉛筆で「日本のために」と書く、「戦争に大切な」という記述を二重線で消す、「闘ひ」という記述の横に「働き」と書くといった具合です。こうした記述があるのは、昭和20年4月に発行された作品です。これにより、戦時中から戦後への転換がどのように行われたのかみることができます。戦後に使った、もしくは廃棄せずに済むようにしたことによる使用痕といえます。

おわりに

紹介した紙芝居は、後町小学校で戦後に集められた可能性のあるものですが、戦時下の子どもへの教化を目的とした内容がみてとれます。戦時中、そして戦後のことを知ることのできる貴重な資料です。

紙芝居の来歴についてはわからないことも多く、戦後80年となり、戦時中、そして戦後のことでもわからなくなっていることが多いことが実感されます。これが、戦後に再び学校資料として収集されたモノであったとしても、戦後の人々が戦時中のことを記憶と記録にとどめようとした活動の一環で残ったといえるでしょう。紙芝居や配給切符のようなモノを通して、私たちはこれからどのように歴史を見るのか、今一度考えたいと思います。(樋口明里)

参考文献

長野市立後町小学校編 1965 『後町教育九十年』 後町小学校九十周年記念事業実行委員会

長野市後町小学校編 1975 『後町教育百年』 長野市立後町小学校

長野市立後町小学校閉校事業実行委員会編 2012 『後町教育百三十七年』 長野市立後町小学校

注

- (1) こうした学校の歴史は、学校誌〔長野市立後町小学校編 1965〕〔長野市後町小学校編 1975〕〔長野市立後町小学校閉校事業実行委員会 2012〕を参考としました。
- (2) 当時の校長の回顧録には「国家主義・軍国主義に関係ある文書・図書・地図・掛図・額等一切を三日以内に焼却するか破棄して学校内から一掃せよとの命令である」「致方ないので図書類は何人かに預けたり、欲しい人に分けたりした」〔長野市立後町小学校編 1965 40〕とあり、紙芝居のようなものは譲渡されたと考えられます。
- (3) 90周年事業では、「社会科資料室をつくり学習に役立てたいので、明治・大正・昭和を通じて歴史を物語る参考資料、例えば、教科書、教育資料等歴史的な参考資料がございましたら、記念資料室に御恵与くださいますようお願い申し上げます。〔長野市立後町小学校編 1965 84〕として、資料を収集しています。

奥深く、おもしろい学校教材の世界…

戸隠地質化石博物館 秋の企画展

「昭和の学校を体験 目からうろこの教材たち」

会期：9月13日(土)～11月30日(日)

はじめに

戸隠地質化石博物館は廃校になった柵小学校校舎を利用しており、柵小学校に関する資料や教材等を展示する学校資料室も整備しました。これは学校の雰囲気を生かし、他の自然史博物館とは趣の異なる館にしたいという意図もありました。そして、開館以来、理科教材をはじめ各種の学校関係の標本や資料を収集・保管してきました。

学校は地域の文化の殿堂でもあったので、地域に関する貴重な財産が残っています。学校の統廃合を迎えた学校から、「資料を見てほしい、そしてなんとか残してほしい」との要望が当館に寄せられるようになりました。中には現在では入手不可能な教材や資料が多数ありました。“アナログ”で手づくりの教材は、学習のために知恵と技術を集め、工夫をこらしたもので、近現代の教育の移りかわりを考える上でも大事な資料です。

最初の「目からうろこ」

こうして集めた資料の中で、まず目からうろこだったものは、算数の教材です。昭和20～30年代に作成されたと思われる「四角錐(ピラミッド)の体積説明器」(写真1)です。木製の直方体を、蝶番を使い、同じ大きさの四角錐に3分割できるというもの。四角錐の体積は「底面積×高さ

×1/3」と習いますが、これはその1/3の理由を体感できるようになっています。

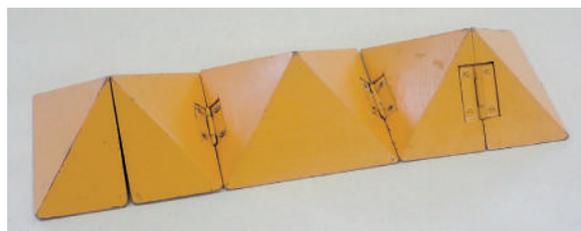
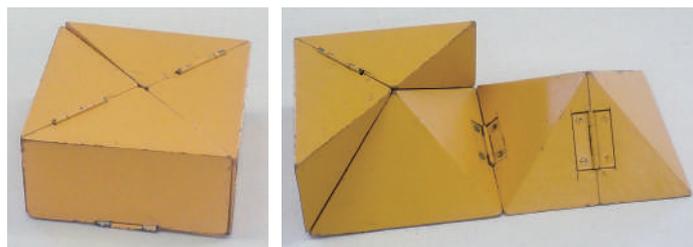


写真1 四角錐体積説明機

また、リンゴを模った「分数説明器」(写真2)も興味深い資料です。木製で削りだしたリンゴが1/2、1/3、1/4などと分割できるようになっています。さらに、



写真2 分数説明機第1世代



写真3
分数説明機
第2世代



写真4 分数説明機第3世代

このリンゴを使った教材が時代ごとに変化していきます。次世代は、分割したリンゴが磁石でつくように工夫してあります（写真3）。その次の世代は、材質がプラスチックにかわっています（写真4）。時代の変化に応じて教材も変化しているのがわかります。

理科教材も面白い

歯車や蒸気機関、エンジンの模型など、自分で回転させたりできる理科教材が大人

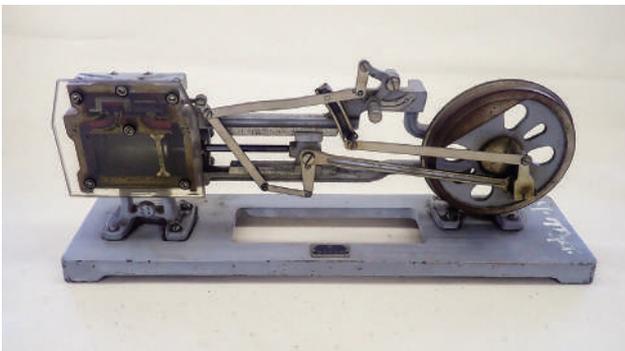


写真5 蒸気機関車模型

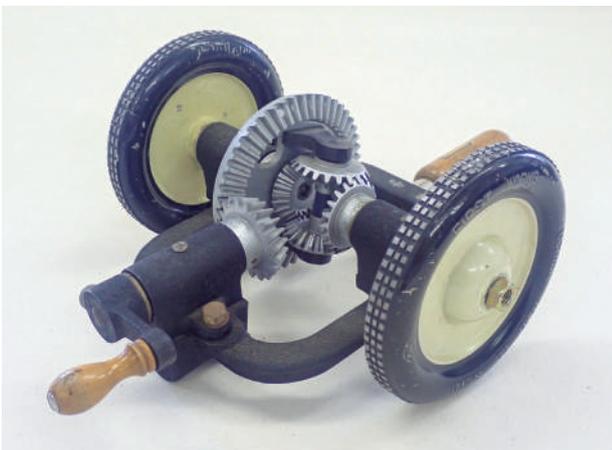


写真6 デファレンシャルギア

にも子どもにも人気です（写真5）。これらの教材は、燃烧で生じた熱エネルギーを運動に変換し、目的にあった力にする機械の構造をわかりやすく伝えており、モノづくりの基礎ともいえるものです。今では教科書には載っていないものですが、日本を支える技術力の基礎でした。力の伝え方や運動方向の変え方、回転数の変化などは自分で動かしてみて初めて理解できるものです。ある小学校には、自動車の車輪の回転を調整するデファレンシャルギアの模型（写真6）もあり、当時の教育内容がわかります。



写真7 七色板



写真8 ラジオメーター

ほかにも七色に塗り分けられた円板を回転させる「七色板」も興味深い資料です（写真7）。ハンドルを回してこの円板を回転させると、七色のはずが不思議と白く見えます。白く見えるのは、いろいろな色の集合が「白」ということを示します。空気中の水滴がプリズムの効果を発揮し、太陽の光が七色に分かれてできる「虹」は、その逆の現象であることがわかります。光のエネルギーを運動に変える実験器具「ラジオメーター」は、ガラス工芸ともいえる資料で、技術的にも素晴らしいと思います（写真8）。

お蚕さま模型や生物標本もすごい

長野県らしい教材としては、「お蚕さま」の模型があります(写真9)。木や紙を使った職人手作りの模型で、蚕の内部の構造も表現されています。明治から昭和の初めにかけて、養蚕業が長野県の経済を支えていた頃、学校でも養蚕について勉強した時の教材です。いろいろな学校に残った模型は、大きさや形の異なるものが残っており興味深いものがあります。



写真9 御蚕様模型3体

そのほか、ライチョウやタンチョウヅル、コウノトリなど今では特別天然記念物に指定され、剥製にはできない動物の標本もあります。カモノハシの剥製やカメレオン・オオサンショウウオの液浸標本、東京湾では現在絶滅したミドリシャミセンガイ(1911(明治44)年に東京湾で採取)の液浸標本、小学生が長野市内で発見した

「双頭のヘビ」の液浸標本など、学術的にみても貴重な標本もあります。

戦争関係の資料も興味深い

明治時代の後半から昭和の初めにかけて、長野高等女学校(現:長野西高)を設立した渡辺敏らを中心に地域の自然や郷土史研究が盛んとなりました。1895(明治28)年には、長野師範学校に博物教室(標本室)が設置され、保科五無齋(百助)による長野県地学標本の作製も行われました。こうした活動が基礎となり、実物から学ぶ教育が行われるようになったのです。「博物学」の授業もあって、地域の土器や石器、産業製品の見本や各種標本などを保管した郷土資料室や学校資料室などができていったのです。

その背景には、長野県は養蚕業が盛んで経済的に豊かだったこと、山の多い土地柄で農地が狭いため、分割せずに長男が相続し、弟たちには高等教育を受けさせ、東京などの都市へ送りだしたことと関係しています。県内で独自の教科書が編纂されたこともあり、「教育県」と呼ばれる一因になっています。

国策紙芝居や戦時中の写真雑誌、墨塗り教科書、短棒など戦争に関する資料も、こうした資料室に保管され、ホコリをかぶったままで廃棄されてしまうものでした。こうした学校資料を、廃校をリノベーションした博物館でなんとか後世に残していきたいと思います。(田辺智隆)

博物館だより 第134号 発行日2025年6月27日

長野市立博物館
〒381-2212 長野市小島田町1414
TEL:026(284)9011
<https://www.city.nagano.nagano.jp/museum>

戸隠地質化石博物館
〒381-4104 長野市戸隠栃原3400
TEL:026(252)2228

鬼無里ふるさと資料館
〒381-4301 長野市鬼無里1659
TEL:026(256)3270

信州新町美術館・有島生馬記念館・信州新町化石博物館
〒381-2404 長野市信州新町上条88-3
TEL:026(262)3500